

# 特集にあたって

山下 信雄 (京都大学)

最近、学生の発表が多い研究集会に参加すると、発表の審査を頼まれることが多くなりました。奨学金の免除職がなくなり、奨学金免除に受賞履歴が大きく影響するようになったためだと思います。学生にとっては死活問題であり、厳正な審査が要求されます。そのため、特に、自分の学生が発表者に含まれるときは、悩んでしまいます。

一方、毎年度末、研究室から学生論文賞に応募させるかどうかを決める際も、困っています。研究室に配属されてきた際には、誰もが学生論文賞を受賞できそうな優秀な学生ばかりなのですが、気がつく、締め切りギリギリに推敲していない修士論文を提出するような学生に変わってしまいます。学生のモチベーションをいかに持続させるかが悩みの種となっています。

本特集では、上記の個人的な悩みを発端とし、その解決策を教えていただくために、「表彰と OR」という特集を企画しました。表彰には、広報・普及、評価、教育の側面があります。本学会や INFORMS などの国際学会では数多くの賞を設け、それらを OR の普及に役立てています。一方、常設部会「評価の OR」などでは、表彰の基盤をなす評価手法の理論的な研究が進められています。また、授業でのコンテストの実施や、各種コンペティションの参加を通して、学生の教育効果を高めている大学や研究室があります。これらの観点から本特集では 6 名の方に執筆していただきました。

まず、初めに海外および国内での OR 関連の表彰について、サイテック・ジャパンの伊倉義郎氏と首都大学東京の山下英明氏に解説していただきました。伊倉氏は、これまで「エデルマンの勇者たち」の連載で、大変興味深い情報を提供していただいています。本特集では、「INFORMS の賞について—Edelman 賞を中心に—」と題して、INFORMS の賞とそこに流れる OR の思想について解説していただきました。一方、山下氏は、本学会の前表彰委員長であり、最近の表彰の改革に携わってこられました。(研究賞や論文賞などの賞金額も上がりました。) 表彰式にこまめに参加しないと、現在の学会表彰の概要はつかめないと思います。そこで、山下氏には「OR 学会賞の変遷と学生論文賞

の OR 的選考方法」という題目で、本学会の表彰と、学生論文賞の選考方法について解説していただきました。今のところ OR 手法が活用されている選考は応募が多い学生論文賞だけのようです。ほかの賞でも選考委員会が OR に頼るほど応募者や推薦者が増えれば、OR はさらに発展することになるでしょう。

次に、教育に表彰を役立てている事例として、繁野麻衣子氏と山本芳嗣氏に「筑波大学での倉谷賞候補選出方法」を、関谷和之氏には「プログラミングコンテストへの敢闘賞の導入と DEA による候補選定」を紹介していただきました。筑波大学の倉谷賞は卒業研究に与えられる賞で、20 名ほどの教員によって審査されるものだそうです。教員が増えたときの意思決定の難しさは大学関係者であれば想像がつくのですが、それを OR 手法で解決できるということはすばらしいです。一方、関谷氏の記事では、授業でのプログラムコンテストの実施事例と 2 段階 DEA による新しい評価手法を紹介しています。本特集では数式が少ないのですが、本記事では多くの数式が出てきておりますので、理論好きな方にもお楽しみいただけるものと思います。

最後の 2 編は、これまでの 4 編とは逆に、受賞される側からの内容になります。OR 関連の表彰で、常連があるとしたら、データ解析コンペティションにおける東工大の中田研と本学会学生論文賞における名古屋大学の柳浦研ではないでしょうか。その秘訣が知りたかったので、本特集では、中田和秀氏と柳浦睦恵氏に「データ解析コンペティションへの挑戦」, 「研究室の学生のレベルを底上げするために」という題目で執筆していただきました。お読みいただくとわかりますが、二研究室の偉業は、安易な裏技によるものではなく、地道な工夫による動機づけと努力の賜物でした。これは、(教員の労力もかなり必要ですが) 私のところでも実践できる内容です。

本特集では、主に大学教育に関連した「表彰と OR」になっていたように思います。「〇〇賞受賞」などのマーケティング効果など、表彰に関連した知りたいことはたくさんあります。いつか企業の視点からの「表彰と OR」の話も聞いてみたいと思っています。